

# 平成13年度の中央調査事務所における学校利用について

倉内 郁子

## 1. はじめに

2002年の学習指導要領の改訂で、学校では、地域の人材や施設と連携を図る動きが活発化している。これに呼応するように、博物館などの社会教育施設では「学校教育との連携」が検討され、当文化財センターにおいても、資料部資料課によって「土器と古代”宅配便”」や、広報紙の発行、展示室の公開など、学校関連の広報普及活動が積極的に行われている。

こういった資料課による普及活動とは別に、近隣の学校による教育利用の要請が、毎年何件か中央調査事務所に寄せられるようになってきている。平成13年度の場合は4件であった。内訳は、小学校低学年2件、高学年1件、中学校1件である。学年だけでなく利用の目的もそれぞれ異なっており、これらの事例を通して、学校による文化財センターの教育利用状況の側面が窺えるものと考え、今回報告することとした。

## 2. 中央調査事務所の対応について

利用の要請があると、まず引率の教職員の来所を依頼し、担当職員と打ち合わせをおこなう。打ち合わせは以下のような内容である。

- ① 利用の内容。どのような目的をもった利用か、生徒からの要望など、出来るだけ具体的に確認し、用意できる遺物などについて打ち合わせる。
- ② 日時、人数、所持品、雨天時の対応など事務的な事項。
- ③ 事務所の業務についての説明や、事務所内の案内。これは、引率の教職員に、子供たちがセンターで具体的にどのようなことを体験するのか理解してもらい、学校での事前学習や、利用後のまとめの参考にしてもらいたいと考えたからである。

今年度の利用の対応については、加藤正信副所長と、筆者とで担当し、見学等で使用する整理室の職員にも、事前準備や説明などで協力を求めた。

さて、中央調査事務所では、現在室内での整理作業

のみが実施されており、事業や作業の内容に応じて、第1から第12までの整理室で、水洗・注記から報告書刊行までの様々な段階の作業がおこなわれている。遺跡の調査というセンターの業務全般について理解するためには、発掘調査の体験や見学を経てから、整理作業を見学することが望ましいのだが、発掘調査をおこなっていないため、遺物からどのような情報を得られるのか、その情報を通じて、昔の人々の生活についてのどのようなことがわかるのか、といった点を中心に利用の計画を立てることとした。

## 3. おゆみ野・ちはら台地域の特徴

次に中央調査事務所が位置するおゆみ野・ちはら台地域の特徴について触れておきたい。

まず、ともに大規模に開発されたニュータウンで、住民の大半もこの地域以外から移り住んだ人々であるという点が挙げられる。生徒たちの両親のほとんどもいわゆる新住民である。このため、周辺地域はもとより、千葉県自体になじみのない場合も多い。このためかえて「自分たちが町の歴史を作っていく」という意識が父母にも学校にも強く、積極的に地域に関わっていこうという意欲が感じられる。イベントやサークル活動も活発で、知的好奇心の旺盛な土地といえよう。

次に、地理的には、ごく一部を除いて、歴史的な景観を完璧なまでに失っている地域という点である。古代の様相については、整理作業の進展に伴い、かなり明らかになりつつあり、具体的な景観を提示することも可能になっている。文化財センターの調査対象からするとやむを得ないことではあるが、本来、連続したものとしてとらえられるべき地域の歴史の中で、古代の部分のみが肥大し、いわば、調査によって判明した古代から、一気に現代の風景へと変貌してしまうような印象すらある。古代と現在との間を今後、どのように有機的につなげていくのかは、この地域にとって大きな課題であろう。

#### 4. 具体的な利用例について

事例1) 小学校低学年による「施設」としての見学利用

千葉市内の小学校第2学年と第3学年それぞれ1校の利用があった。授業のタイトルも「町たんけん」「博士になろう!」と児童の地域社会への関心を喚起するようなものとなっており、公共施設を中心に見学をおこない、仕事の内容を調べることを目的とした利用である。

低学年の場合、歴史の勉強が始まっていないため、「どのような仕事をしているのか」といった点を中心に整理作業の内容を紹介することとし、下記の見学コースを設定した。

##### 1) 収蔵庫

おゆみ野・ちはら台地域の調査で出土した遺物の総量を、実際に収蔵庫内の見学をすることで実感してもらう。

土器、貝サンプルなど、実際にテン箱をいくつか目の前で取り出し、中の遺物に触れさせる。

貝層の断面剥ぎ取り資料により、土の中に埋まっている状態を想像させる。また、遺跡からは土器・石器・自然遺物など、様々な種類の遺物が出土することも説明する。

##### 2) 水洗と注記

発掘現場から取り上げられた状態の遺物(土器)を目の前で洗って、土器の模様などがはっきりわかるようになるのを見学させる。

ラベルの役割と注記作業について説明する。

##### 3) 土器の復元作業と実測

土器を使われていた時の形に復元するために、根気のいる作業が必要であることを説明する。

土器の形状を一定の方式に基づいて記録することで、比較や情報の交換が可能になることを説明する。

##### 4) 石器の整理について

整理担当者(島立桂上席研究員)から、見つかった石器をどのように調べるのか、どんな作業が必要なのか、どのようなことがわかるのか、といった説明を受ける。

##### 5) 貝塚の整理について

整理担当者(西野雅人上席研究員)から、貝塚からどのようなものがでてくるか、昔の人たちの暮らしについてどのようなことがわかるのか、といった説明を受ける。

##### 6) まとめ

エントランスに展示してある埴輪、古墳出土の玉類など、おゆみ野・ちはら台地域から発掘されたその他の遺物についても触れ、事務所の作業全般を通じて様々なことがわかること、埋蔵文化財の大切さなどを話し、まとめとする。

##### 7) その他

引率の教職員に広報紙「房総の文化財」を人数分渡し、帰校後の配布を依頼する。

広報紙の内容が低学年には難しい部分があるため、家庭へ広報紙を持ち帰り、今日の見学について話をしてほしい旨、児童に話をする。

各作業の見学や説明は10分を目安とし、質問にはその場で適宜回答する。

3), 4), 5)については整理室が手狭なため10名前後のグループに分かれ、グループごとに順番を入れ替えて見学した。また、4), 5)については、特に実際に作業をしている職員が、各自の作業を中断して説明する形をとることで、より興味を持ってもらえるのではないかと考えた。

なお、第3学年については事前打ち合わせの際、火おこしをやってみたい、縄文クッキーを焼いてみたいといった要望が寄せられたため、前者については資料課白鳥上席研究員の来所を仰ぎ、実演をおこなった。あいにく当日は小雨模様であったが、収蔵庫を使用して実施し、見事な発火の様子に児童からは拍手が起こった。このほか縄文の原体を使った文様付けや、黒曜石の切れ味の実験も短時間であるが体験させることができた。また、縄文クッキーについては、資料課が生涯学習フェスティバルで使用したレシピの提供をうけ、引率の教職員に手渡した。帰校後、材料をそろえて実施したいとのことであった。



事例1) 石器の整理について説明を受ける



今回は資料課の協力を得ることができたが、事務所独自で実演や体験を用意することは難しい。時間的にも小学校の場合は低学年、高学年とも午前中に設定され、また、いずれも学校から徒歩で往復するため、見学が1時間程度に限られ、あまり時間的余裕はないとあってよい。

#### 事例2) 高学年による「調べ学習」での利用

第6学年が手分けして地域の歴史について調べるとのことで、当事務所には30名の来所となった。事前にグループごとに話し合い、質問を持参するとのことであったが、質問の内容によっては資料の準備が必要となる可能性もあり、来所前に質問の概略を連絡してもらおうこととした。また、センターや事務所の仕事についての説明も盛り込むこととした。

見学は低学年のスケジュールに準じておこない、説明の内容については、歴史の授業をおこなっている学年であることから、すでに学習した内容と結びつけることを念頭において実施した。

事前に寄せられた質問等は次のようなものであった。

- ・ 土器にさわってみたい。
- ・ 土器の材料はどこから入手したのか
- ・ 食料はどこまで採りに行ったのか
- ・ 自給自足ができたか
- ・ 貝塚からはどんなものがでてくるのか
- ・ 当時の自然環境と遺跡との関係はどうなっているのか

いずれも貝塚の整理作業で対応することが出来るため「5) 貝塚の整理について」の説明後、質問に答えることとした。熱心にメモを取る様子が見られ、このうち2名については、数日後、追加の質問のために再来所している。

小学校の利用では、低学年、高学年とも引率者として、教職員の他に2名から4名の保護者有志が同行し、一緒に見学している。いずれの方々も非常に熱心に見学され、日を改めて家族で、あるいはPTAなどで見学をしたいという要望もあった。残念ながら平成13年度については実現しなかったが、今後、申し込みのある可能性は否定できない。要請には積極的に応じていくべきと思われるが、散発的な見学の申し込みがあった場合、どのように対応していくのかあらかじめ検討しておく必要がある。



事例2) 土器について質問する

#### 事例3) 中学生による『職業体験学習』での利用

学校からの依頼文書によると、「労働体験を通して、多少なりとも社会を知り、自己の職業観形成・進路決定に問題提起」をしていくための一環と位置づけられている。このため、学校側が生徒の希望に基づき、受け入れ施設の選定や交渉、教職員が来所しての下打ち合わせをおこなうとのことであった。

その上で、来所する生徒自身が、出勤時間、服装、持ち物、注意点などを電話で確認する。(生徒たちにとっては、電話での対応など、この時点から『職業体験学習』が開始している。)今年度、中央調査事務所での職業体験学習をおこなった生徒は7名であった。

学校側からは始業時から終業時まで、他の勤務者(調査補助員)と同じスケジュールで、とのことであったが、販売や製造といった業種とは異なり、業務の内容が多岐にわたっていること、文化財に対する理解を深める機会として活用したいことなどから、午前中に見学や説明をおこない、午後に水洗・注記作業を実施することし、次のような日程を作成した。

8:50 登所、清掃

9:00 所長挨拶

VTR「古代を未来へつなぐ」によるセンターの業務紹介

事務所内の案内と各作業の説明

10:30 休憩

10:45 接合作業の体験

VTR「竪穴住居の調査」による発掘作業の説明

12:00 昼食

13:00 水洗・注記作業の体験

14:30 休憩

14:45 水洗・注記作業の体験

16:30 講評

16:45 解散

VTRは「古代を未来へつなぐ」はセンターの事業全体を理解してもらうために、「竪穴住居の調査」は午後、土器の水洗を体験するにあたり、各自が扱う遺物がどういった経緯で手元にあるのか、発掘調査や整理作業の中でどのような位置づけを持っているのか理解してもらうために用いた。

接合作業は、用意した遺物の関係で、生徒たちが接合できたものは少なかったが、友人と相談しながら根気よく取り組む姿が見られた。

水洗作業は、エプロンは各自が持参、ゴム手袋は事務所で用意した。生徒たちにとっては予想以上に大変な作業だったようで、作業開始後10分、20分とたつにつれ、皆黙々と作業をするようになった。しかし、用意した土器すべてを7人で手分けして完全に終了させ、責任を持って分担を果たした姿には、職員、調査補助員こそって感心させられた。

## 5. まとめ

今年度については、中央調査事務所所属の全職員の協力を得たこと、空間的な余裕があったこと、作業工程が幸運にも学校が希望した作業等に当たっていたことなどが相まって、いずれも好評を得ることが出来た。

しかし、各事業とも収束へと向かっている中で、次年度以降、利用の要望に同じように答えていかれるかは不明である。またタイトな整理作業のスケジュールの中で、準備や案内といった時間を確保することも難しくなるであろう。かたや地域の学校からは今後も文化財センター本部だけでなく、調査事務所に対しても協力の要請があるのではないかとと思われる。中央調査事務所では、要望に応じて、といういわば受け身の対応であったのだが、今後、広報普及活動全般の中でどのような意義があるのか、どのように位置づけていくのか、検討の必要があると考える。

最後に、平成13年度の学校利用を通じて実感したのは、生徒たちにとって印象深いのは、センターが保管している遺物や、発掘や整理をとおして得られる「学術的」成果だけではなく、大量の遺物に取り組み、そこから何かを引き出そうとしている姿勢そのものである、ということである。文化財センターという組織の日常の活動全体が注目されているのだ、と言い換えることも出来よう。日々行われている地道で単調な作業は、我々にとって「研究」や報告書刊行までの過程にすぎない。しかし、最終的に導き出される「歴史像」だけでなく、この過程の部分を知ってもらうことこそが、埋蔵文化財への新鮮な驚きや、継続した関心へとつながっていくのではないだろうか。